ダンス・イン・ザ・マフィア　2

ダンス・イン・ザ・マフィア　2

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18995065

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 芹霊, エク霊, ♡喘ぎ, もぶおじさん×霊幻

誰得？俺得！なマフィアパロです。師匠総受けです。暴力描写や殺人描写を含みます。今回は芹霊とエク霊です。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

ダンス・イン・ザ・マフィア　2

「面白そうなことになってるじゃねぇか」
『伝説の暗殺者』の出現に、ＵＭＡでも現れたかのようなワクワクを隠さずに霊幻は目を輝かせる。
「芹沢、情報収集に行こう。そいつはアジトの牢屋にでもぶち込んで──」
いつのまにか売人は拘束から逃れていて、銃を霊幻に向かって構えていた。
「せめて、キサマの首を手土産に──！」
「っ、馬鹿！」
──芹沢は。
『殺意を感じたら殺せ』としつけ（・・・）られている。
「……あちゃあ」
霊幻が止めるのも間に合わず、芹沢は愛用のコルト・ガヴァメントで売人を撃ち殺していた。
「あ……」
殺してから芹沢は青ざめる。ひとを、ころした。その事実にショックを受ける。
優しいこころが、ぐしゃりと潰れる。
「俺、は」
芹沢が取り落としたコルトをキャッチしながら、霊幻はよしよし、と芹沢の背中を撫でてやる。
「ファミリアのメンツとしては殺して良かったんだよ。お前はよくやったよ、芹沢」
レイゲンファミリアは殺しは御法度。ただし例外はある。正当防衛は仕方ない。
──それに、ドン・アラタカはファミリーに甘い。
「霊幻さん、俺……」
「芹沢、待て」
人を殺して極限の興奮状態にある芹沢に我慢をしいて、その手を、子供にするように霊幻は引いてやる。

「屋敷へ」
車を屋敷に走らせて、霊幻は奥の寝室に芹沢を連れて行った。
「……よし」
許しを得た芹沢は、激しく喰らいつくように霊幻の唇にむしゃぶりついた。
「ん……ふ、ぁ……」
芹沢が人を殺した後はいつもこうだった。性欲が極限まで高まって、手当たり次第に発散しようとする。最初は娼婦に任せていたが、余りの激しさに娼婦が嫌がったので、霊幻が引き受けるようになっていた。
「芹沢、服ぐらい脱がさせろ、って」
ほっておくとボタンを引きちぎってしまうので、少し静止しながら手早く霊幻は服を脱ぐ。
──カネパッソ（狂犬）、と日頃は穏やかな芹沢が呼ばれているのを、こんな時には霊幻は痛感してしまうのだった。
「うしろ、慣らすから」
ローションを手に取って、霊幻は慣れた手つきで後ろをほぐす。
ほぐしながら膝立ちになって、裸になった芹沢の怒張をぴちゃぺちゃと舌だけで舐めてやる。
霊幻はもともと所属していたギャングで、ボス相手に『そういう』仕事をしていた。男の相手なら慣れていた。
もっとも、ドンとなった最近は芹沢をなだめることぐらいにしか使っていない技術だったが。
「……芹沢、いいよ」
広いベッドに押し倒されて性急に挿入される。
「ん……っう」
大きなペニスに貫かれて、霊幻は苦しげな声を上げる。
「あっ……あっ、あ」
ガスガスと乱暴にピストンされると、甘い音が混じり始めた。
男に媚びようとする身体が、霊幻は嫌になった。
「霊幻さん……」
泣きそうに顔を歪める芹沢の頭をぐしゃりと撫でてやる。
「そうだよ、俺だ」

「すみません、俺、また霊幻さんに無体を」
「いいよ、気にすんな……っあ」
一度ともった欲情の炎は出すまで消えない。
「はっ、はぁっ、は、っふ、」
荒い呼吸音に支配された部屋で、霊幻の中を穿ち続けた芹沢は、
霊幻の中から溢れるほど射精してやっと止まった。
「は、ぁ……っ」
やっといつもの優しい芹沢に戻る。
「すみません、人殺す度にこれじゃ、ソルダート（兵隊）失格だ」
「お前、もう現場に銃持ってくのやめたら？」
ごしごしとティッシュで腹に散った自分の精液を拭ってから、霊幻は中に出された芹沢の精液を掻き出す。
「そうは行きません。俺はあなたの犬ですから、いつでも噛めるようにしておかないと」
「……お前は俺の可愛い部下だよ。犬じゃない。お前はお前の人生を生きるんだ」
「そんなこと言われたら、もっと懐いてしまいます」
芹沢は目を細めて霊幻の手に頬擦りし、バウッと吠えてみせる。
霊幻は芹沢のそんな姿を見て悲しくなってしまう。元引きこもりだった芹沢はマフィアが資金源にしてる『引きこもり矯正スクール』によかれと思って親に入れられ、人格破壊をされた。
廃人になったやつは用済みとして家庭に捨てられたが、芹沢のようにソルダートとして使えそうな奴は、各マフィアに売られた。
当時チョウミ・チッタで覇権を取っていた「チオード（爪）・ファミリア」のボスに拾われた芹沢は、その優しい気質を嫌われ、更なる人格破壊をされた。『殺意を感じたら殺せ』『ファミリアの番犬として死ね』と。
少しでも誰かの役に立ちたかった芹沢は、必死にファミリアの言うことに従った。芹沢をはじめ『能力』を持つ構成員で固められたチオードファミリアは最強を誇っていたが、とあるキッカケで潰され、途方に暮れていた芹沢は霊幻に拾われることになった。
『犬』としてしか生きられない自分を飼ってくれる霊幻を、芹沢はとても慕っている。

「『ミエーレ・ヴィリーノ』……伝説の暗殺者が現れたのなら、マフィアの勢力図がごとっと崩れる可能性がある。ここからは情報戦だ。芹沢も部下を使ってミエーレの情報を集めてくれ……ん？どうした？」
じと、と芹沢が霊幻を見つめる。
その蜂蜜色をした髪と、ミルクのような白い肌を。
「ミエーレ・ヴィリーノって霊幻さんのことじゃないんですか？」
ぶはっ、と霊幻が噴き出した。
「お前、俺が傾国の美男子に見えるのか？」
「いえ、ちょっとまぬけな顔に見えます」
「殴られたいのか？俺がミエーレなんだったらこんな金欠でひーひー言ってないよ。暗殺は儲かるんだからさ」
笑いながら霊幻は服を身に付けていく。
釈然としないまま芹沢も服を着ていく。たまに霊幻から感じる、ゾッとするような気配。あれは暗殺者のものではないのか、と芹沢は思っていた。口にはしないが。
それに。
（俺、男相手に勃つの、霊幻さんだけなんだよなあ）
決して美男子ではなくとも、霊幻は不思議な色気を持っていた。
そんなことが重なり、芹沢は、どうしても霊幻がミエーレなんじゃないかという疑いを捨て切ることができなかったのだった。

※

「……というわけで、ミエーレの居場所と目的を調べたくて……聞いてるのか、エクボ」
じーっとエクボが霊幻の顔を覗き込む。
「キスマークついてんぞ、ドン」
「！！」
芹沢には身体に跡はつけないように言い含めてある。だからそんなはずはないのだが、思わず霊幻は首元を手で覆ってしまった。
「まぁた芹沢を慰めてやったのか。甘やかすのも大概にしろよ」
「……仕方ないだろ。芹沢は人を殺すとああなる。発散させてやら

ないとダウナーになるからな」
はぁ、とエクボは男前な顔を呆れたように歪めた。
「妬けるねぇ。お前、俺様が惚れた弱みでここに繋がれてるの分かってんだろ？」
エクボは元々は茂夫が飼われていたギャングでＳＰをやっていた凄腕のオールラウンダーである。
「……今晩くるか？」
それを繋ぎ止めて置けるのなら、自分の身体など安いもの。霊幻はそう思っている。
「もっと情熱的なお誘いが欲しいねぇ」
「エクボ。──お前の香りが恋しいよ」
合格。にやりと笑ってエクボは霊幻の顎を持ち上げて激しく口付ける。
コンコン、と執務室のドアがノックされて２人は慌てて口を離した──が、遅かった。
「師匠、学校が終わりました。僕たちも『ミエーレ・ヴィリーノ』について調べます……って、何してるの、エクボ」
ムっとした顔で茂夫がエクボの口付けをとがめる。
「師匠に手は出さないで、って言ってるよね、前から」
「それにしても昼間っから不潔ですよ、２人とも」
エクボは冷や汗をかきながら茂夫と律に敵意はない、と示すために両手を挙げる。
エクボは諸事情により、この２人に頭が上がらなかった。
「今のは事故だ、事故。エクボがよろけて受け止めたらそうなっちまったんだよ。なっ？」
霊幻とて子供達に大人の爛れた関係を知られたく無かった。霊幻は『箱庭』を美しいものとして保っていたいのである。
「そーそー、事故、事故」
「本当かなぁ……」
じとりと茂夫はエクボを見る。
「それより兄さん、偽者退治の話を」
「あ、そうだった。師匠、師匠の偽者が出たなんて許せません。僕達で捕まえて詫びさせて、殺しましょう」

興奮する茂夫に待て待て、と霊幻は落ち着かせる。
「前から言ってるが、俺は『伝説の暗殺者』じゃない。だから偽者でもなんでもないし、詫びさせる必要も無いし、殺すなんてもっての他だ。レイゲン・ファミリアは？」
「殺しは御法度……」
不満そうに茂夫が言う。
茂夫は霊幻が『ミエーレ・ヴィリーノ』、伝説の暗殺者だと信じきっている。だから暗殺者の先輩として、『マエストロ（師匠）』と霊幻の事を呼ぶ。
原因が無いではない。
実は、このファミリアは霊幻と茂夫、律、エクボの４人で３年前に立ち上げたばっかりだったりする。

３年前。
「あっ♡あんっ♡ぼすぅっ♡さいこうっ♡あいしてるぅっ♡」
霊幻はそこそこ大きなギャングのボスの情夫をしていた。
毎晩組み敷かれ、身体をまさぐられ、あばかれる。
うっとりと恋をする目をして見せて、老人に差し掛かっている醜い中年男の唇に情熱的な口付けを捧げる。
霊幻はずっとそうやって生きてきた。
娼婦の子として産まれて捨てられ、アジア系の容貌に珍しく色素が薄いのを重宝されて、ギャングにオモチャとして買われた。
そんな生活でも、霊幻はそこまで不満は無かった。ボスの情夫ともなればそれなりの自由と金が与えられる。
霊幻はその金を使って、ギャングで兵隊として育てられている子供達に菓子を買い与えたり、玩具を与えたりするのが好きだった。
ボスは愛嬌のある霊幻を寵愛していて、霊幻の頼みならなんでもきいてくれた。──たった一度の例外を除いて。
「いやだっ、兄さん、助けてっ！」
男たちがまだ１０歳にも満たない律を笑いながら裸にしていく。
「ボス！何をしてるんだ。やめさせてくれ」
霊幻はいつものようにバスローブ姿でボスにすがる。
「あいつらにもストレス発散が必要なんだよ。律は反抗的で生意気

だ。一度躾けてやる必要があるのさ」
「だからってこんな……お願いだ！」
すがってもボスが自分を見ないのに徐々に霊幻は青くなっていく。
もはや少年では無くなった霊幻への、ボスからの寵愛が薄れ始めていた。
「律！お前ら、律を離せ──！」
ぶわ、と『能力』を発揮させせようとした茂夫を見て。
ボスは霊幻に銃を向けた。
「お前らの大好きなレイゲンお兄ちゃんを殺されたくなければ、大人しくするんだな」
それを見て茂夫が『能力』を引っ込める。
ぷつん、と。
霊幻の中の、ほんの少しばかりあった愛着が切れて消えた。
「──めんどくさい」
ああ、ああ、何もかも面倒臭い。男に媚びるのも、機嫌を取るのも、慰めてやるのも。
──霊幻は土壇場で面倒くさくなる悪癖があった。
「は？」
訝しむボスの手から、受け取るように銃を奪って。
霊幻はボスを撃ち殺した。
「てめ」
咄嗟にコチラを撃とうとするボスの護衛を丁寧に１人ずつ撃ち殺し、黙々と銃を回収する。
「ひ、ひぃっ」
余りにも無慈悲で正確な射撃に逃げようとした下っ端を霊幻は撃ち殺す。
「もうダメなんだよ、お前ら。子供に手ぇ出しちゃ終わりだ」
俺が殺す。
霊幻はポカンとする兄弟にニコッと笑いかける。
「服着て、逃げろ」
だが子供達はお互いに頷き合うと、落ちている銃を手に取る。
「援護します」
「これからどうしますか、逃げますか」

くるり、と踊るように霊幻は振り返る。
「いいやぁ？全部殺す。１人残らずぶち殺す。このギャングは今日で終わりだ。レクイエムを歌ってやろう」
霊幻はディーエス♪イレ♪ディーエス♪イラ♪と楽しそうに口ずさむ。……音程は酷いものだったが、かろうじてヴェルディの『怒りの日』だと分かった。
「……お手伝いします」
「俺１人で充分だよ、こんな寄せ集めのでかいだけの組織なんて」
アジトの中を闊歩し、ドアを蹴りあけ、身体を捻りながら霊幻は銃弾を避けて相手を撃ち殺す。
「ソルベ♪セクルム♪」
裸足を血でぴちゃぴちゃ言わせながら、霊幻は騒ぎを聞きつけてドアから顔を出したギャングを眉間一発で撃ち殺していく。
「イン♪ファビッラ♪」
ナイフで死角から襲いかかってきたギャングのナイフをカカト落としの要領で蹴り上げ、そのまま脳天に一撃をくらわす。
「がは……っ」
目を回したギャングに一発。
「ぶち込まれるのも悪くないだろう？」
散々自分をオモチャにしてきた男たちを鉛玉で犯して、少しは気が晴れるかと思ったが、異常に冷えている自分に霊幻は少しウンザリする。
──どうやら、やはり、自分はネジが一本足りないらしい。
とがっかりしかけるが、後ろからついてきてる子供達を守ろうとしているせいかもしれない、と思い直す。
「すごい……」
茂夫が目を輝かせる。
「大した事ないさ、こいつらはまともに訓練も受けていない有象無象だ」
だからギャングの戦略の底上げのために、臓器売買に使っていた子供達を戦闘員として育てよう、と進言したのは霊幻だった。
「さあ、豚の血で風呂に入ろう」
容赦なく霊幻は隅から隅まで殺し尽くす。

「テステ♪ダビデ♪クム♪スィビッラ……おっと」
ひゅん、と日本刀が目の前を切って霊幻はタタラを踏む。
「ちっ、エクボか」
ばっと身体を翻して霊幻は後ろ回し蹴りでエクボの死角から得物を落とさせようとする。
「このやろっ！やってくれやがったな……もう壊滅状態じゃねぇか。用心棒の意味がねぇ」
腕で蹴りの威力を殺しながらエクボが毒づく。
「そうか。可哀想に」
迷いなく霊幻が目潰しを繰り出す。
後ろに飛んでエクボは避けた。
「危ねぇっ！」
が、すぐ距離を詰めてくるため銃が効果的に使えない。霊幻は舌打ちして落ちてたナイフを拾った。
近距離ならコチラの方が効率が良い。
「待て待て待て！俺はただの雇われだ。このギャングに忠誠心なんてものはこれっぽっちもねぇ。最初はメンツのためにお前さんを殺そうかと思ったが……なかなかどうして、お前さん、ただの人形じゃねぇな？」
「……」
バスローブに返り血だらけの霊幻はじっとエクボを見る。品定めしているようだった。
「面白い……気に入ったよ。本当は膨大な『能力』を持ってるそいつらを使って何か面白いことをしてやろうかと思っていたが、おまえさんにつくのも面白そうだ」
ニヤリと笑うエクボが、真面目な顔をして床にはいつくばる。
「俺の血を、お前のために使おう──」
裸足の霊幻の足の甲にエクボは口付けた。
「……本気か？」
「俺が血の誓いをしたのはお前だけだぜぇ？信用できねぇか？」
「さっきの今で、ギャングを裏切ったヤツを信用しろと？」
「それもそうだな。だけど、俺を敵に回したいのか？」
エクボは厄介なオールラウンダーだ。霊幻は少し悩んでから、

「ついてこい」とエクボを率いて、アジトを殲滅した。
――その凄まじいまでの実力を茂夫は目の前で見ているので、霊幻のことを『伝説の暗殺者』だと思っているし、師匠と呼んでいる。
律は色々とショックだったのか、その辺りの記憶が曖昧で、霊幻には恩人として素直になりきれないままでいた。
捕まっていた子供達は逃がし、さてどうしようかと霊幻が悩んでいたら、エクボが４人でマフィアを立ち上げようと提案してきた。
最初は用心棒稼業と暗殺で財をなし、ファミリアが少し大きくなってきたころに、芹沢がいたチオードファミリアが勢力を拡大し、レイゲンファミリアを併合しようとしてきた。
女子供にも容赦が無かったチオードファミリアのやり方が気に入らず、霊幻が断ると、チオードのボスは色々あって霊幻を殺しかけた。
それにキレた茂夫の『能力』によって、チオードは再起不能なまでに壊滅させられたのだ。
チオードファミリアの残党を呑み込んでレイゲンファミリアは一気に大きくなる。そして、今に至る……というわけだ。
「俺はただのケンカの上手い一般人だ」
ドンの椅子に座りながら霊幻はそんな事を言う。
「だから、情報集めは欠かせないのさ。情報収集だけはちょっと手伝ってくれるか？」
「「Ｓｉ、ボス」」
コートを翻して兄弟が執務室を後にする。
「……売人の親がどこか吐かせる前に殺しちまった。エクボはそっちを頼む」
「ドンはどうするんだ？」
ちょっと微笑んで、
「子供達の相手をしてやらないとな」
霊幻ははぐらかした。

※

夜。霊幻は寝室で報告書を眺める。

「……少なくとも３つのファミリアが『ミエーレ・ヴィリーノ』にくだってる可能性があるな」
状況は思ったより深刻だ。いつの間にここまで入り込まれたのか、うかつだったと霊幻は唇を噛む。
『ミエーレ・ヴィリーノ』の目的は何なのか。そして次のターゲットは──
そこまで考えて、ノックの音に思考が中断される。
「よう、霊幻。報告に来たぜ」
「ご苦労」
エクボだ。報告書を受け取ろうとして、ひょいとすかされる。
「ベッドの中できいてくれや」
「……魅力的なお誘いだな」
霊幻はよれよれのタンクトップとトランクスを脱いで、大きなベッドに上がった。
エクボも裸になってのしかかる。
裸になってみせるのはお互い『武器を持ってませんよ』という誠意の証だった。
「売人の親だがな、フィオーレファミリアだった」
くちゅ、と霊幻に指を舐めさせながらエクボがつぶやく。
「やっふぁりか……」
ミエーレに落とされた最初のファミリアがフィオーレだ。霊幻はエクボの指を舐めながらやっぱりか、と呟く。
「ウチの娼館にチョッカイ出したのは、ミエーレがシノギを禁止したせいらしい」
「ん……」
ぬめらせた指を霊幻の後口に差し込む。体内を広げる動きに、霊幻はぴくりと肩をこわばらせた。
「ヤクを売るのを禁止したり、チャカの取り引きも辞めさせられて、フィオーレファミリアは大混乱してる」
「ぁあっ……、っん、ミエーレは何を考えてるんだろうな……？」
ぐぷぐぷと秘所から卑猥な水音がする。エクボがローションを足していた。
「あ、あ、あ、あ！」

追い詰める動きに耐え切れず霊幻は出さずに絶頂する。
「出来上がってきたな？挿れるぜ」
「イかせてから挿れるとかホント悪趣味だなお前……っあああああ♡」
まだ蠕動している媚肉を引き裂かれて霊幻は枕を握りしめてトコロテンする。
「はっ……気持ちいいぜ、霊幻……っ」
「そりゃあ、何より、っん♡」
エクボはゆるゆると腰を動かし始める。
「ミエーレが乗っ取った他のマフィアでも同じようなことが起こってる」
「っん♡んあっ♡ああっ♡義賊、気取り、ってやつか」
「そうだ、な！」
ずぐ、とエクボが一気に霊幻の奥を穿つ。
「あああぁああっ♡深いっ♡」
甘イキした霊幻がシーツを足の指で引っ掻く。
「ミエーレは、どうも……」
ぱん、ぱん、と腰を打ち付けながらエクボは思考を巡らせる。
「んぁっ♡あんっ♡ああっ♡な、にっ？」
挿送に耐えながら霊幻が返す。
「……いや、憶測は言わない。それが情報を正確にするからな。報告は以上、だ」
ぐい、と霊幻の足を持ち上げて。
「あ♡」
せりあがる射精感のままにエクボは腰を打ち付ける。
「イくイくイく、えくぼぉ……っ♡」
報告のご褒美に恋人みたいなキスをして、２人はほぼ同時に射精した。

服を整えて。
「……しばらくはお前の部屋にも護衛を増やした方がいいんじゃないか？……お前に何かあったら、俺様……」
丸めたティッシュをゴミ箱に投げながらエクボが言う。

「気持ちはありがたいがな、必要ないみたいだ」
困ったように笑って霊幻が窓を指差す。

そこには、金の髪に白い肌の美少年が、薄らと笑って腰掛けていた。

続